

バリ島のプラ

岡谷 公二

PURA AT BALI

Koji OKAYA

*Atomi Gakuen Women's University, Niiza-shi, Saitama 352*

バリ島で私にとってもっとも興味深かったのは、プラと呼ばれるヒンズー教の聖所であった。

インドネシアの人々が一般に現在イスラムを宗教としてしている中において、バリは、宗旨を変えることなく、いまだにヒンズー教を信じ続けている、ほとんど唯一の島である。ただしバリのヒンズーは、同じシヴァ、ヴィシュヌ、ブラーフマンといった神々を信じながら、インドのヒンズーとは著しく異っている。それは、土着の精霊信仰や大乘仏教と習合して、私の見たかぎりでは、日本の古い信仰、とくに沖縄などの信仰とよく似ているように思われた。

プラは普通寺と訳されるが、あきらかに神社に近い。稲田の中に、ちょうど鎮守の森のように鬱蒼としげった森があらわれる。それはまさしく稲の海に浮かぶ島だ。プラの森の繁りようは一種独特なので、馴れてくると、遠くからでもプラと見わけがつくようになる。神域中の樹木は、一木たりとも伐ることは許されないで、その上バリの人々は実に信心深いので、さらに台風がないという条件も加わって、プラの森は亭々とそびえ、樹相が実に豊かだ。

人々に神木としてもっとも崇められるのは、土地ではワリギンと呼ぶガジュマルである。神域の木でなくても、ガジュマルの太木の下には、供え物のしてあることが多い。

それにしても、なんという化物のように大きいガジュマルだろう。私はバリへゆく前、奄美の加計呂麻島で東洋一というガジュマルを見たが、そんなものとは比べものにならない。高さ二十米から三十米にも及び、深々と茂って、無数の気根を垂らし、その奥に闇を抱えこんで、樹木自体が不気味な神像のようだ。大きなガジュマルになると、高い枝の上に小屋が設けられていて、人が住んでいることさえある。

プラは、壁に囲まれた場所の意だというが、実際プラの多くは、まさに低い塀や石垣をめぐらしている。入口には、チャンディ・ブンタール（割れ門）という独特の門がある。塔を真中から割って左右に引き分けた といった姿だ。この門を入ったところが外庭（ジャバン）で、さらに石段を登ってもう一つの門をくぐると、至聖所ともいうべき内庭（ダラム）である。内庭に入るまでの門や壁面に、怪奇なヒンズーの神々の姿が所狭しと彫刻されているけれども、一步ダラムに入ると、そこには全く神の姿がない。小さな祠やお堂、メルーと呼ばれる塔が立っているが、その中はいずれも空で、神像は一切祀られていない。バリの人々にとって、神は目に見えないのだ。このような点は、インドのヒンズーと明かに違う。

ヒンズーをはじめとする外来の宗教を一切排し、古来からの信仰に生きていくバリ・アガ（バリの先住民）の村、たとえば島の東部の山奥にあるトゥンガナンへゆくと、そのことは一層よく分る。ここにもプラはあるのだが、ヒンズーの神は一切消えて、いくつかの空の祠が立っているだけである。それは、日本の山村のお社などにいかにもよく似た、なつかしい姿だ。

私たちは、丸一日借り切っても一万円にもならないタクシーを駆って、島中のプラを見て歩いた。四国の半分の広さの島の中に二万のプラがあるというが、名もない村の、名もないプラに心を惹くものが多かった。二十米近いガジュマルの暗い森の中に静まりかえっていたタバナン近くのプラや、塀も石垣もない、小さな森の中に鎮座していた、クルンクンへゆく道の路傍のプラなどはとくに忘れ難い。

私たちが泊めてもらっていた、サヌールのA氏の広い邸の中にもプ

ラがあった。ただしこれは、日本の屋敷神に類するものではない。A氏の買った敷地の中に、たまたまサヌールの村のプラがあったのである。土地の所有者はA氏なのだから、法的には、そのプラの木を伐ろうが、プラを取り払ってしまおうが、A氏の勝手のはずである。しかしそれができないのだ。

A氏はインドネシア人なのだけれども、アメリカで数学と医学を勉強し、かつて大学で教鞭をとっていたこともある合理主義精神の持主である。そのA氏にして、村の人々の深い信仰の無言の圧力の前に、プラには指一本触れることができない。

プラは、A氏の家の二階の食堂の眼下にある。石づくりの古びた、低い塀にかこまれた十坪ほどの土地で、型通り内庭と外庭に分れ、内庭の方には大きなガジュマルが茂っていて、眺望の邪魔をしている。その木がなければ、濃青の珊瑚礁の海が一望にできるのである。

プラの外には、雨期には倍近くの大きさになるといふ、蓮の咲く小さな池があり、そのほとりに、神木だと言われて、やはり伐ることのできないもう一本のガジュマルがある。以前はそのあたりまで神域だったのであろう。

プラの門には普段は鍵がかかっている、入ることができない。これは、A氏の邸の中のプラだけでなく、大方の村のプラがそうだった。日本の神々のように、バリ島の神々も、祭の時にしか来臨しないらしい。

それでもその小さなプラには、一日一回、村の人がやってくるようであった。その姿を見かけないのに、いつの間にか落葉が掃かれていたり、割れ門を守護する魔神の像の耳に赤いハイビスガスの花が挿してあったりする。

一時期、毎晩、百才近い老人がプラに来て寝泊りしていた、とA氏が話してくれた。なにしに來たのかは分らないが、おこもりのようなものなのであろう。夜おそく来て、朝早く帰ってゆくので、ほとんど誰も気がつかなかったという。

実際、トッケイ（とかげ）がココ椰子の梢で鳴き、庭の照明がガジュマルを黒々と浮び上らせる夜更け、プラの戸の鍵をあけて、そっと入ってくる者が折々あった。

日の出を見に浜へ行って帰ってきた時、一人の男がプラの中を掃いている姿を見かけたこともある。掃除が終わると、男は、塀に立ってかいてあった自転車に乗って、どこかへ帰っていった。

このように、旅行者である私の眼にも、プラをとりまく信仰の熱気のようなものがはっきりと感じられた。

プラで行われるバリの祭こそは、まことに幻想的である。私が見たのは、いくつかのささやかな村祭りにすぎなかったけれども、プラにあふれる色彩の鮮やかさには目をうばわれた。

マンゴー、パイナップル、バナナなどの果物、極彩色に染めた菓子、供花や、丸焼きの鶏などを巧みに組み合わせた、時には高さ二米にも及ぶ宝冠のような供物を頭にのせ、紫や金や緋色の長衣を着て、列をなして歩んでゆく女たちに出合えば、どこかで祭があるのは確実である。その女たちのあとについてゆけば、濛々とした香煙に包まれ、ガムラの音の鳴りひびくプラにいつのまにか入りこんでいる。

祠の前には、こうして女たちが運びこんできた供物が無数に置かれている。この供物を見るだけで、人々は色彩に酔うだろう。

もっとも美しい祭、それは葬儀だ。バリでは葬式もまた祭なのである。

ただしこの島では、葬式は、人の死後にすぐ行われるのではない。莫大な費用を要するので、時には、五年後、十年後に行われることも珍しくない。とくに大貴族の葬式となると、全島から人の集まる大規模なシウである。

金箔塗りの巨大な牛をいたたく棺、祇園の山車を思わせる、見上げるように高いワーカー（霊柩塔）、男たちがにぎやかにかつぎまわるみこし、白く顔を塗り立て、卑猥な恰好をして人々を笑わせる道化役者、そしてにぎやかなガムラン……最後に、真晝間、衆人の前で棺は炎に包まれるのである。そしてそのあと、灰は珊瑚礁の海にまかれるのだ。

ヒンズーの教えにしたがい、人は死ぬと一旦埋葬され、土に帰える。ついで掘り出されて、火で焼かれ、煙となって大気の中へのぼってゆく。そして最後には、灰となって水に沈む。即ち、地、火、大気、水の四大に触れることになる。

バリの葬儀には、どこを探しても悲哀の影がない。あっけらかんとして明るく、陽気である。たとえ死後、かなりの時間が経っているにしても、この明るさは尋常ではない。

なぜこんなに葬式が明るいのかと訊ねると、私たちが案内してくれたバリの青年はこともなげに、

「それは、神様のところへゆけるからですよ」と、答えた。